

共立女子職業学校裁縫科主任 中川と
ある女教師の数奇な生涯

中川浩一

昭和二（一九二七）年三月二十二日、共立女子職業学校（現・共立女子大学家政学部）が東京市神田一ツ橋の校舎で挙行了た卒業式の終了直後、来賓として列席した老女が、突然に昏倒した。意識不明のまま、手当の甲斐なく数時間後に死去するこの女性は、前年に当たる大正十五年一月、老令を理由に勤続二十年にわたった同校での裁縫科教員の職を退き、悠々自適、開始までもないラジオ放送を楽しみ、一合の晩酌を欠かさぬ生活を、なしてきたのである。

明治二十一（一八八八）年八月、創立日も浅い共立女子職業学校を卒業し、同年九月に佐賀県尋常師範学校教員をふりだしに、母校での教員歴も長かった中川とう（安政四年十二月―一八五八年生）にとつて、創立記念日を期して挙行する卒業式に参列後、思いつきぬ校内で閉じた生涯は、冥利につきるものであったといえるだろう。

一

昭和二年三月二十五日、共立女子職業学校の同窓組織である校友会が葬儀を挙行するに先だち、「報知新聞」夕刊は、「珍らしき老女流教育家」のサブタイトルをつけて、中川とうの死を報じている。四十年に及ぶ教員生活の中で、鹿児島女子実業補習学校の創立に参画し、晩年は母校としての共立女子職業学校で裁縫科主任、学校長代理（学

校長鳩山春子）を勤めたのだから、女流教育家と呼ばれたのもむべなるかなといふべきだろう。

中川とうは、安政四年十二月四日、信州伊那谷に封地をもつ石高一万七千石の飯田藩で、御物頭を勤める中川雄之助逸山（一八二二―一八九〇）の二女として誕生と飯田市役所保管の除籍謄本（戸主中川元とうの長兄）には書かれている。幼少時代の経歴は不明の部分が多いけれども、十三、四才から十六才（廢藩置県前後）の頃には、飯田町内伝馬町に私塾明学院を開いていた萬壁純のもとに通い、読本、習字、算術を教授されたという。^②

明治八（一八七五）年春、東京外国語学校教員として生計をたて始めた長兄の元（はじめ、一八五二―一九一三）を頼って、一家は上京した。伊那谷をさかのぼって諏訪盆地にでて、以後は甲州街道を徒歩し、飯田から八日を要して東京に着いたとされている。旧藩主堀家の上屋敷として保有した由来をもつ浅草向柳原（現・台東区浅草橋）にまず居住した。

明治九（一八七六）年二月、東京女子師範学校（現・お茶の水女子大学）に入学する。水戸藩儒家として名を知られた青山延壽を父とした青山千世^③は、その前年に開設された同校の第一回入学生であった。青山千世が森田龍之助に嫁し、その長女として生れた菊栄が著作者となる「おんな二代の記」（一九五六年）によると、明治八年七月に実

施した入学試験合格者七十余名の中には、〝きものの裾に一寸もある赤いふきを出した十四、五歳のあどけない少女から切髪姿の未亡人、小学校教員の経験者もあるというふう〝であったという。〝入学試験にはかな交りの文章で書いた理科の本「登高自卑」から出た問題、算術は四則、漢文は「皇朝史略」の一節が出ました〝というのだから、中川とうの場合にも、状況は似たようなものであったろうし、私塾で受けた教育が、多少は役だったと思われる。

入学試験では首位を占め、明治十二（一八七九）年三月に卒業した青山千世の場合とは異なり、中川とうの場合には、明治十一年七月に退学を余儀なくされた。七十余名の第一回生では、第一回卒業生になり得たのが、青山千世を含め十五名であったとい⁴う。生徒の学力がまちまちで、修業に長い期間を要したからと説明されている。けれども中川とうの退学は学業不振が原因ではなく、婚約成立のゆえであったと、伝えられてきた。

二

長野県飯田市役所に保管されている除籍簿謄本（戸主中川元）によると、明治十二年七月十日、千葉県市原郡大厩村土族中村元貞妻が離婚によって復籍したと記録されている。こうして中村とうから中川とうに戻った後、再び嫁することなく、昭和二年に生を閉じたのだが、結婚生活を軽蔑しての挙ではなく、また婚家から追われた結果でもないとい「中川とう子刀自記念録」（一九二七年）には記される。同書には、後々まで〝あの時あの儘師範学校を卒業していたならばと、嘆声を発せられ〝たとの記述がある。

親族間の言い伝えによると、学業継続を強く希望したとうを、親族

が無理強いに退学させ、結婚に追いこんだのだとされている。やむなく中村家に嫁しはしたが、医師としての夫にあきたらず、自らの意志で婚家を離れた由である。

共立女子大学に保存されている中川とうの履歴書によると、東京女子師範学校退学から明治十七年四月、渡邊辰五郎に師事するまでの期間が空白であるけれど、「中川とう子刀自記念録」では、時期は不明ながら、秩父大宮の小学校に教員として赴任した事実があるとされている。しかしながら〝一夜刀自の寢室に忍入った曲者があった。之を捉へて見ると、村長とか校長とかであったので、一葉の託証文を土産に、憤然として東京に立戻った〝との記事がみうけられる。⁵

渡邊辰五郎への師事は、和服裁縫修業が目的と、履歴書には書かれている。そうした挙にでた動機について、中川とう自身は直接に書き残してはいないけれど、家長としての兄に頼って主体性のない日々を過すのにあきたらなかつたがゆえと考えられる。自らの意志で婚家を離れたと伝えられる性格のなせるわざであったろう。

渡邊辰五郎への師事は、明治十四（一八八一）年に私塾として発足した和洋裁縫伝習所への入門かと思われる。「創立五十年史渡邊学園」（一九三〇年）によると、明治十四年、東京女子師範学校裁縫科教授を囑託された渡邊辰五郎が、東京府本郷区湯島四丁目に開いた私塾が手狭になったのを機に、本郷区東竹町に移築されたものを、そうよんでいる。中川とうは、明治十九年二月まで、和洋裁縫伝習所で業を積んできた。

明治十九年九月から同二十年五月までの期間は、東京洋服裁縫伝習所で修業した。ついで同年六月、共立女子職業学校に入学、甲科裁縫科で学び、明治二十一年八月に卒業する。その翌月、佐賀県尋常師範学校教員を拝命、月俸十七円であった。

「創立五十年史渡邊学園」によると、東京女子師範学校での職を辞した渡邊辰五郎（一八四四—一九〇七）は、明治十九（一八八六）年三月、手島精一、服部一三ほか数名と計り、女子職業学校を起し、和洋裁縫伝習所は、夫人の協力にゆだねたとされている。創立以後数年間ハ専ラ創立者トシテ 又主席教員トシテカヲコノ学校ノ経営ニ致シタとの記述がある。

右の文章によると、共立女子職業学校設立の主体者は、手島精一、服部一三、渡邊辰五郎のようにみえるけれど、「共立女子職業学校設立ノ趣旨」には、あわせて二十九名の氏名が連ねられている。また中には、中川とうが東京女子師範学校在学中に、クラスメートあるいは上級生であったと思われる人たちが含まれていた。後年、中川とうが共立女子職業学校裁縫科主任として仕え、関東大震災による校舎復旧資金調達を補佐した際の学校長（第六代）鳩山春子が、多賀姓で発起人のひとりになっている事実にも、注意を払っておこう。

明治十九（一八八六）年三月六日、和洋裁縫伝習所に仮設され、同年八月神田に移転した共立女子職業学校に、中川とうがただちに入学しなかったのは、一見奇異に感じられる。つらつら我国婦女の世を渡る有様を視るに、概其父兄良人に便りて、其衣食を仰ぐのみにして、自ら生業を営むことを知れる者甚少し、一朝其杖柱と頼める父兄良人の不幸あるにあへば、忽身を処するたつきを失ひて、俄に貧苦に陥り徒に人を怨み、世を嘆ちて、せんすべを知らざるに至る者あり、その惨ましさいはん方なしと書きだした同校の設立趣意書には、中川とうの共感する個処が多かつたはずである。長兄のもとに寄食するにあ

きたらず、手に技能を持ち、社会に自立しようとして、裁縫に志したと思われる中川とうにとって、専女子に適する諸の職業を授け、ることを第一義とする学校の発足は、待ち望んだものだったと考えるのが当然だろう。

けれども、発足当初の共立女子職業学校は、理想とはかけはなれた存在であったようで、小学校四年を終えた者を入学の基礎資格とし、一年ないし二年の修業で適宜卒業という状態であったと伝えられている。専門教育の部分はともかく、併せ教授される数学、英語などの一般教育は、東京女子師範学校に二年間も学んだ中川とうの眼からみれば、程度の低い存在にみえたと思われる。

四

中川とうの名前が、日本の女子実業教育史において、しかるべき位置をしめることができるのであれば、それは鹿児島県内に女子実業教育を創始し、その基礎を培った業績のゆえと判断したい。

共立女子職業学校を卒業後、直ちに佐賀県尋常師範学校に奉職した中川とうは、二年間の勤務を経て、明治二十三（一八九〇）年八月、母校としての共立女子職業学校により返され、教員の一人となった。前記した履歴書には、月俸拾円と記されている。

明治二十四年五月に依願退職、同年十月には静岡県尋常師範学校へ教諭試補、月俸十二円となって赴任し、明治二十六年三月まで勤務のうえ、翌四月から再び女子職業学校教員（月俸拾円）に復帰した。母校で教鞭をとったのは、明治二十七年九月までであった。

明治二十七年十月、中川とうは、共立女子職業学校を卒業して間もない二人の女子教員を同道して、鹿児島市易居町に区費で新設された

鹿兒島女子実業補習学校に赴任した。同校本科第一回卒業生であった森田梅子の回想によれば、「未だ汽車は熊本への遠きであり、矢獄の險を突破するに由なく、日向の難所を船路して、四十路に近き御身にて、二十過ぎしばかりの若き先生二人伴はれ、外国へでも行かれる思ひして、此僻地へ下向した由である。

中川とうの鹿兒島赴任については、鹿兒島市立女子興業学校の同窓会誌である「歸厚會誌」の三十年記念号に、中川とう自身によせた文によって、具体的な事情が明らかとなる。共立女子職業学校に範をとって、鹿兒島県内に女子実業教育を創始しようとした有志が、共立女子職業学校校長である手島精一（一八四九—一九一八）に、教師の派遣を要請するのが、その因である。裁縫、刺しゅう、造花専攻の教師各一名が選にのぼった人物であり、中川とう、成田ウメ、鈴木カネとそれぞれ記録されている。

中川とう自身の回想によると、「時は丁度、日清間に戦端が開かれた際に、交通機関は定期を変更され、普通船も御用船に廻はされ、私共一行が神戸より長崎に行き、港内に入る時は水上警察署に導かれる等実に物凄き光景でありました。時局の為に船は各所に寄港を余儀なくされ、漸く一週間目に鹿兒島港に着くや、埠頭には多数の方々が大列んでお出でになり、一行が上陸致しますと、其方々が一行を出迎のために御出で下さったことが判り、不案内の私共は大変喜ば敷また力強くなりました。それは商議員の五六名の方々と、名山小学校長神崎先生外職員方でありました」という次第であった。

ところで、共立女子職業学校校長手島精一が、鹿兒島女子実業補習学校に赴任させる教員の一人として、中川とうを指名したについては、それなりの理由が存在する。彼女が独身であったのも一因と思われるが、長兄の中川元と手島精一は、ごく親しい間柄なのである。

明治十一年（一八七八）年二月、文部一等属としての手島精一が、パリで開催される万国博覧会に派遣されたとき、師範制度取調を任じて同行したのが、中川元（当時、文部四等属）であった。両名は、文部大書記官九鬼隆一の補佐役としても活動し、約一年間の共同生活を過している。

明治二十四年、実業教育創設を計って、手島精一が東京職工学校（東京工業大学の起源）の設置に従事したおり、文部省視学官、文部大臣秘書官を勤めてきた中川元は、多くの助力をなしたと伝えられてきた。そうした事情ゆえ、手島精一の側でも頼みやすかつたろうし、中川とうの場合にも、断れなかつたのだと思われる。

五

鹿兒島女子実業補習学校は、女子に技芸教授の場をもたせようとの主旨によって、鹿兒島市内の商業人が、子弟の多くが通う鹿兒島名山小学校校長神崎宗八とはかつての設置とされている。男尊女卑の傾向が激しく、女に学問させてもむだとの思考によって、小学校高等科へ女子を進学させる例すら稀という状況にかんがみ、尋常科卒業で入学できる技芸学校の設置が計られた由である。

鹿兒島市に設立趣意書を提出し、区費を充当する私立学校としての発足であった。開校式は、明治二十七年（一八九四）年十月一日に行い職員六名、生徒六十名と記録されている。校長神崎宗八は兼務、一般教育担当は男子教員二名、技芸は東京から赴任の女子三名が担当したのである。

授業を始めてみたところ、いちばん困ったのは言葉がなかなか通じないことであつたと、中川とうは回想している。「或日生徒が参りま

して、「先生カミガフレモンデオ暇タマハンカ」と申しますから、あ
あ紙がほしいのですかと申しますと、生徒は愈々涙目になり、前述の
言を繰り返しますから、是はただ事ではないと、あたりの生徒に聞き
ますと、夫れは頭痛がする故帰宅したい事と判り、早速帰宅させまし
たが後で大変笑はれました。又或日「オナカ入レモンデオカヘシヤツ
テタマハンカ」と申しますから、それならお薬をあげませうと申しま
すと、生徒は転げて笑ひますから、之は変だと思ひあたりの生徒に聞
きますと、それは着物に綿を入れる事と判り、大笑ひいたしました。
其当座の失敗談は一二ではありません」という状態なのである。しか
し、生徒の「実に活発であっさりした気風」が、男まさりと評される
中川とうの気質に合ったためか、「日々愉快に過したことは誠に仕合
でありました」と追憶されている。

明治二十九年四月、校名改称が行われ、鹿児島女子徒弟興業学校と
なり、このとき、撰科（小学校高等科卒業生対象）の中に設けた裁縫
科の修業年限を、一年から二年に延長した。造裁科、刺裁科は当初か
ら三年、明治二十八年十二月には、機織科が増設されている。⁽¹⁵⁾

明治二十七年十月、着任当時の月俸は二十円、翌年十二月には二十
三円となった。この間、当初の約束であった一年間派遣の日限が経過
したため、辞職帰京を申し出たところ、県知事から強く慰留され、母
校に長期派遣が要請された結果、明治三十四年十二月まで鹿児島に在
勤することになった。この間に、月俸は三十円（明治三十二年十月）、
三十三円（明治三十四年五月）と増額されている。

帰京は、神戸市内に新設される私立湊東女学校の開校準備を、母校
から依頼されたのが、原因であるようだ。「中川とう子刀自記念録」
に鳩山春子（共立女子職業学校校長）が寄せた文によると、「当時実
科教員に適當なる人物極めて其数に乏しかりし為め、此種学校の創立

又は一学校内に此種の科を新設する場合、教員を本校に依頼せられた
れば、本校は此の為め其の求めに応じ、本校に奉職中の同女史に本校
より派遣を懇請せしに、其の都度女史も奮って其の任を尽されたから
であります」と説明されている。⁽¹⁶⁾

私立湊東女学校は、後に神戸市の管理にゆだねられ、神戸市立湊東
女子技芸学校となった。現在では、神戸市立須磨高等学校となり、八
十年をこえる校歴を誇る存在である。⁽¹⁷⁾

六

私立湊東女学校は、神戸市内に設置された女子実業学校では、最初
の事例であった。発議は、明治二十六（一八九三）年十一月十三日、
蕨谷慶蔵を主唱者とする三交協会によってなされている。

三交協会は、神戸市生田区、兵庫区の一部において、実業家有志が
組織した任意団体であった。江戸時代さながらの「お針屋」教育によ
つてのみ、裁縫教育がなされている状況にあきたらず、技能修得に加
えて適切な教養を身につけさせる狙いを持たせての女子裁縫学校設立
を、三交協会は意図していた。

明治二十七年六月一日、神戸市湊川小学校坂本分教場校舎に場を求
めて、湊川小学校付属裁縫専修科が発足する。修業年限三年、修身口
授、裁縫専修、家事随意を教育内容とし、教員二名、生徒は当初の段
階で、約五十名と記録されている。⁽¹⁸⁾

このような学校設立経過をみていくと、鹿児島女子実業補習学校の
設立事情と、その状況があまりにもよく似かよっている事実に驚かさ
れよう。



右から中川とう、成田うめ子、鈴木かね
(明治二十八年一月)



鹿兒島女子徒弟興業学校在職当時の中川とう
(明治三十四年)



湊東女学校在職当時の中川とう(明治三十八年)



共立女子職業学校退職当時の中川とう(大正十五年)

ところで、湊川小学校付属裁縫専修科は、明治三十五年に到って、「小学校令」改正により、設置継続が不能となった。関係者は対策に苦しんだが、結局は神戸市当局の斡旋をうけ、私立学校に組織替えのうけ、存続させることになり、あわせて拡充が計られている。中川とうが、神戸に赴任したのは、この時点なのである。

私立湊東女学校は、神戸市生田区楠町五丁目に存在した区有財産の旧野田邸を校舎とし、修業年限三年、修身、家事、裁縫の三教科学習という条件で、明治三十五（一九〇二）年五月二十九日認可、六月一日に開校した。一か年の補習科、実技の別科も併設であった。¹⁹

中川とう自筆の履歴書によると、私立湊東女学校教員任命は、明治三十五年七月、家事科担当、月俸三十五円と記されている。開校直後の就任ということになるわけだが、鹿児島時代の経歴からみて、非公式にかかわりを持っていたと考えるべきであろう。神戸在勤当時の中川とうについては、具体的な状況は判らない。明治三十九年七月付で月俸が四十円になっているが、これは依願退職を申し出たことに対する功勞措置であったと考えられる。

開校後の状況を、神戸市立須磨高等学校の沿革略史にもとづいてたどってみると、開校式当日、生徒作品数百点を展示のうえ即売、学校維持金の一部に充当し、以後この企てを、奨励会と称して年二回行ったとされている。明治三十六年六月には、刺繡科、造花科作品を天皇に献上する。

開校当時、神戸市内には県立高等女学校が二校、私立女学校一校に加えて、ミッション・スクールが、女子中等教育にたずさわる状況にすぎなかった。そのため、私立湊東女学校の発足は、好評を博した由である。そのため、校舎の増築（明三八・五・五落成）、学則改正（明三七・四・二六実施）が行われている。

その後は、明治四十五（一九一三）年四月一日、神戸市への移管がなされ、市立湊東女子技芸学校となり、大正六（一九一七）年に市立女子技芸学校と改称した。

中川とうは、明治三十九年七月、私立湊東女学校を退職する。その理由については、明らかにする資料がみあたらない。

七

昭和二（一九二七）年三月二十二日、中川とうが死去した後、遺品の中から、明治四十（一九〇七）年一月二十五日付で下付された海外旅行免状（旅券）がみつかった。²⁰アメリカ合衆国への渡航を志してのものと、説明されている。五十才に手のとどく段階で、なぜ洋行を志したのか、その理由は判らない。親族には、合衆国に移民した者は皆無の状況に加え、合衆国側に移民排除の気運が高まっていた時点であるだけに、その目的がなになにであったのか、興味がもたれよう。

結果についてみると、洋行は実現しなかった。母校としての共立女子職業学校から、裁縫科教員として奉職するよう求められ、明治四十（一九〇七）年四月就任、以後は動続して大正十五（一九二六）年一月に退職するまで、二十年近くにわたって、教鞭をとったからである。

里がえりの形で奉職した共立女子職業学校での教師中川とうについては、「中川とう子刀自記念録」において、多くの同僚、生徒が、さまざまな想い出をよせている。

中川とうが、母校としての共立女子職業学校で、三度目の教鞭をとり始めたころ、裁縫担当教員は、五十人前後に達していた由である。その中で、中川さんより年長の方が一人二人はあったように思ひま

すが、何といつても、中川さんが一番の大先生でありました。それは武家育ちの義理堅い卒直な性格で、衆人の尊敬をひくに足るものがあり、その上、弁舌に於いても文筆に於いても一頭他を抜いて居られたからであります。毎年一回、桜友会の総会が開かれるのが例でしたがそんな時に一同を代表してお話をされるのは、いつも大抵中川さんに極って居りました。五十人もある裁縫の先生達は、いづれも多く学校の卒業生であり、それを引締めてその上に立って行くには、どうしても中川さんのやうな古参の長老で、衆人の敬服するやうな人格者でなければなりません」と、共立女子職業学校で幹事を勤めた大久保介壽は述べている。²¹⁾

長老教員としての中川とうが、母校で果たした役割のひとつに、教育課程の統一があった。「同じことを黒板にかけて教へるにも、先生によって書き様が違ふ、裁ち方の式を書いてもその式が人によりて同一でない。多致の意見や流儀を取捨選択して、打って一丸とする」役割を中川とうは果たしたわけである。²²⁾

大正七（一九一八）年八月、共立女子職業学校桜友会裁縫研究部編「裁縫新教科書」上・下は、「校内における裁縫教授の統一を図ることが目的でありましたが、外部に対しては、職業学校の裁縫科教授の如何なるものなりやを示し、各実科女学校其他に良教科書を提供する目的をも含んでゐた」と評されている。²³⁾

この教科書が、寸法を鯨尺からメートル法に改め、あわせて内容に増訂を加え、大正十四（一九二五）年十一月に、版を改めたおり、中川とうは、共立女子職業学校桜友会裁縫研究部を代表して、序文を書いた。これとは別に、高等女学校用裁縫教科書の執筆を志し、同僚であり、また母校卒業生後輩の佐藤松野との共著による「高等女学校用メートル法適用 新編裁縫教科書」巻一―五（大正十五年九月）を世

にだしたのが、中川とうの公的生活を飾る最後の成果となった。

八

中川とうが死去してから、六十年に近い年月が経っている。それゆえ、彼女から教えをうけた人たちを探しあてるのは、容易な業でありえない。まして、筆者にとっては、誕生以前に世を去ってしまった幻の人である。祖父の末妹という縁続きではあるにしても、子孫を残さなかつた中川とうは、伝説的人物に相当する。

中川とうの教え子に対面した経験はただ一回、祖父の妹で中川とうからみると姉にあたる鬼澤（中川）静の孫にあたる村田久代の語った先生の面影のみである。中川とうは、厳格な一俗にいうこわい先生だったという。そのことは、「中川とう子刀自記念録」の中でも、教え子の一人―野口フサ子が、鹿児島女子実業補習学校当時を回想しながら、「私は其当時まだ十六才の少女でありまして、先生があまりにしっかりした御気丈な御性格に恐れを抱き、大層恐い先生のやうに思つてゐたのでありました」と述べている点からも確かめられる。²⁴⁾

そうであつたとはいえ、中川とうは、なかなか親切な先生でもあつたという。後に野口フサ子が、神戸の高等女学校に赴任したおり、中川とうは、「神戸の土地にあかるくおはしました故、細かに同地の地理人情及び風俗等を教へ下さつたばかりで無く、御知人を紹介して下さいました」由である。教科書の共著者となつた佐藤松野の場合には、明治三十六（一九〇三）年四月、広島県豊田郡忠海町に設立された郡立女子技芸学校に赴任するおり、私立湊東女学校在職中の中川とうが、鹿児島、神戸で、それぞれ女子実業教育にたずさわつてきた経験をふまえながら、細部にわたつての指導を行つたといわれている。²⁵⁾

中川とうの生涯は、女性の社会的自立過程をみていく場合、そのかなり早い段階に位置づくものといえるだろう。結婚の継続も、女性個人の意志にもとづいてなされるべきであって、意にそぐわぬものは解消させてしかるべきだと信じ、かつ実行したように思われる。教え子の一人であった村上友代の回想によると、「私は一応両親のいはれる通り嫁にいった。そうして考へる処があつてかへつたところが、先方の両親がどうぞ帰って呉れ、何が不足か、せひかへつてくれと、こんな人間でも帰つてくれるようにと直接いろいろいはれたけれど、一度考えあつて出た以上は決してかえらぬ、又再婚もせぬ、あんなに先方の親達まで来ていはれるのだから自分の両親までも心配して帰る様にいったけれども、どうも済みません、我ままの点は御許し下さいといつてお断りを述べ、それから一人で行くについては十分覚悟もせねばならぬ」として、教職を社会的自立の手段とした由である。⁽²⁶⁾

家族制度のおきてがきびしい中で、自我にめざめ、かつ社会的、経済的に一個の独立した人格を貫きとおした点に、着目すべきだろう。

注

- (1) 実際には、四女である。長女は夭逝。次女は藩主縁戚の堀家に嫁し、三女は維新後、旧水戸藩士の鬼澤(きざわ)家に嫁している。
- (2) この私塾の詳細については、「長野県教育史」第八巻 史料編(一九七三年)に具体的な記述がある。女子には、読本として「女今川」「女庭訓書」が授けられたと記される。
- (3) 女性解放運動の先駆的存在であり、戦後、初代の労働省婦人少年局長を勤めた山川菊栄(一八九〇—一九八〇)の母である。

共立女子職業学校裁縫科主任 中川とう

- (4) 山川菊栄「おんな二代の記」(一九七二年 東洋文庫) 五十七・五十八ページ。
- (5) 「中川とう子刀自記念録」(一九二七年) 七ページ
- (6) 岩田朝一・古谷博「共立女子職業学校の成立過程」(一) 創立に参加した人々 共立女子短期大学家政科紀要 第二十七号(一九八四年) 所収。
- (7) 右に同じ。
- (8) 「たまざと」創立90周年記念号(一九八五年 鹿児島女子高等学校) 三十八・三十九ページ。
- (9) 「中川とう子刀自記念録」六十六ページ。
- (10) 同右 六十七〜七十ページ。
- (11) 「たまざと」三十八ページ。「中川とう子刀自記念録」六十七ページ。
- (12) 「中川元先生記念録」(一九一八年) 五十八ページ。
- (13) (8) に同じ。
- (14) (8) に同じ。
- (15) 「たまざと」三十九ページ。
- (16) 「中川とう子刀自記念録」三十三・三十四ページ。
- (17) 「神戸市立須磨高等学校(第二高等女学校) 沿革年表」
- (18) 「神戸市立須磨高等学校四十周年誌」(一九六二年) 四十九ページ。
- (19) 右に同じ。
- (20) 「中川とう子刀自記念録」十二ページ。
- (21) 「中川とう子刀自記念録」四十八・四十九ページ。
- (22) 「中川とう子刀自記念録」四十九・五十ページ。
- (23) 右に同じ。
- (24) 「中川とう子刀自記念録」一一一・一一二ページ。
- (25) 「中川とう子刀自記念録」一〇三・一〇四ページ。
- (26) 「中川とう子刀自記念録」一一一・一一三ページ。

参考文献

- 岩田朝一・古谷博「共立女子職業学校の成立過程」□ 創立に参加した人々
共立女子短期大学家政科紀要 第二十七号（一九八四年）
鹿児島女子高等学校「たまざと」創立90周年記念号（一九八五年）
共立女子職業学校校友会裁縫研究部編「増補裁縫新教科書」（一九二五年 大
日本図書）
神戸市立須磨高等学校「創立四十周年記念誌」（一九六二年）
神戸市立須磨高等学校「創立60周年記念アルバム」（一九八二年）
中川九郎編「中川とう子刀自記念録」（一九二七年）
中川浩一「文部大臣秘書官中川元―森有禮とのかかわりからみた」茨城大学
教育学部紀要（人文・社会科学・芸術）第三十三号（一九八四年）
中川とう・佐藤松野「高等女学校用メートル法適用 新編裁縫教科書」巻一
〆五（一九二六年 大日本図書）
二見剛史「女子教育源流考―鹿児島県を事例にして」鹿児島女子大学研究紀
要 第六卷第一号（一九八五年）
渡邊学園「創立五十年史渡邊学園」（一九三〇年）

謝 辞

本稿を草するにあたっては、鹿児島県立図書館内奉仕課、鹿児島女子高
等学校、神戸市立須磨高等学校、神戸市立図書館閲覧係の諸機関、小久保富
男、下村まさ子、神宮司サチ子、古谷博、満留トミの各位から、資料提供、
調査協力をうけた。記して謝意を表したいと思う。

（茨城大学教育学部社会科）（一九八五年九月二十八日受理）